

神原文庫とケンペルの『日本誌』

教育学部教授

土屋 盛 茂

今から二十年近く前のことである。恩師野田又夫先生に香川大学に集中講義においていただいた折り、先生の大阪高校時代の教え子の金森先生が図書館長をなさっていたこともあって、当時の閲覧係長の多田さんに案内してもらって、野田先生のお供で神原文庫の書庫に初めて足を踏み入れるということがあった。居並ぶ稀書を目のあたりにして驚嘆したのはいうまでもない。そのころ私は、必要があって蘭学関係の本をほんの少々読みかじっていた。そのせいもあろう、一冊の古い蘭語辞典が目にとまった。それは、François Halma 編の蘭仏辞典 (*Nieuw Nederduitsch en Fransch Woordenboek*) であり、とくに目を引いたのは、原本の頁の間に和紙の罫紙がはさまれ、その各々に蘭語と訳語と思われる日本語が書き込まれていることであった。幕末「ハルマ」は蘭学を学ぶ者にとって必須の蘭和辞典であり、しかもそれには、稲村三伯等の「江戸ハルマ」(寛政 8 (1796) 年) とオランダ商館長ドゥーフ (Hendrik Doeff) 等の「長崎ハルマ」(または「ドゥーフ・ハルマ」) (天保 4 (1833) 年) との二種があるということは、おぼろげながら知っていたが、しかし、素人の悲しさ、目の前にあるのがそのいずれなのか、まったく分からなかった。(ちなみに、後 (昭和62年) 京都大学の松田助教授がこのハルマを調査され、これは佐久間象山らが進めていた「ドゥーフ・ハルマ」増訂出版計画のなかで作られた草稿ではないか、との推測を立てられた。)

その後の野田先生との雑談のなか、話が蘭学に及んだとき、元禄のころオランダ商館員として日本を訪れたドイツ人のケンペルが書いた『日本誌』という本は、18世紀のヨーロッパでよく読まれ、カントもそれを通して日本のことを学んだようなので、ケンペルを調べてみるのもおもしろいよ、と教えていただいた。私にとって、ケンペルの名を聞いた最初である。たしかにカントは、『永遠平和のために』 (*Zum Ewigen Frieden*, 1795) のなかで、ヨーロッパの列強が他の世界に対して行った不正を非難するところで、「それゆえ、中国と日本が、これらの

来訪者を試した後で、次の措置をとったのは賢明であった。すなわち前者は、来航は許したが入国は許さず、また後者は来航すらもヨーロッパ民族のうちの一民族にすぎないオランダ人だけに許可し、しかもその際にかれらを囚人のように扱い、自国民との交際から閉め出したのである」(岩波文庫『永遠平和のために』(宇都宮芳明訳) 49頁) と言い、また、また自然地理学の講義においても日本について一章を設けている (『カント全集』第十五巻 (理想社) 参照)。多少なりともカントを研究する者としては、この先生の勧めがあった以上、ケンペルをひもどいてみるべきであったが、怠け者のこととてついそのままになってしまった。

神原文庫は、香川大学初代学長の神原甚造先生の遺贈図書から成るものであるが、さらにまた昭和62年、先生の御令孫神原夏樹氏から残りの図書と資料が寄贈された。平成3年に神原文庫蔵書目録編集委員会が設置され、私も委員の端に名をつらねることになった。他の委員会とはもかく、この委員になるのはいやでなかった。役得としておもしろい本や資料を他にさきがけて目にするができるだろうからである。果たして、「古筆手鑑」や「長崎城下地割絵図」など珍しいものを見ることができた。しかし、そのなかに見つけたケンペルの『日本誌』のオランダ語版 *De Beschryving Van Japan*, 1733は、そのような事情で、私にはとりわけ気になる本であった。そのためか委員会でこの本のことをあれこれ言ってしまう、その結果、ケンペルについてなにか一文を「図書館だより」に書くようにおおせつかることとなったという次第である。

しかし、ケンペルについてなにも知らないのだから、泥縄式に関係の本を探すことから始めなければならなかった。『日本誌』のテキストとしては、さしあたり翻訳に頼るしかなかったが、唯一の全訳、今井正編訳『日本誌』上下 (霧ケ閣出版、1973、1989) は図書館にないのを口実に敬遠し、『日本誌』の二つの抄訳、斎藤信訳『江戸参府旅行日記』 (東洋文庫、1977) と小堀桂一郎訳「鎖国論」(同

人著『鎖国の思想』(中公新書、1974)所収(『日本誌』に付録として収録されている、日本の鎖国政策を弁護する内容の論文)とを読み、参考文献としては、その『鎖国の思想』とB・M・ボダルト=ベイリー著、中直一訳『ケンペルと徳川綱吉』(中公新書、1994)を読んだのみである。したがって、枕たたくさんの落語よろしく前置きの長い、頼りないケンペル『日本誌』の紹介文になることをお許し願いたい。

さてケンペル(Engelbert Kaempfer)は、1651年9月16日ドイツの小都市レムゴーで牧師の子として生まれた。そこのラテン語学校で基礎教育を受けた後、16歳のときよりハーメルン、リュネブルク、リュベック、ダンツィヒの学校に学び、クラカウ大学で哲学、歴史、諸言語を、更にケーニヒスベルク大学で医学、薬学、博物学などを学んだ。そのときすでに30歳であった。それからスウェーデンに旅行し、1683年スウェーデンのペルシャ宮廷への使節団に秘書官として加わるようになった。彼はかねて、未知の世界の探検、とりわけアレクサンダー大王のインド遠征の足跡を辿るという夢をもっていたので、夢の実現に近づく第一歩として勇躍この使節団に加わったであろうが、しかしそれは、思いもかけぬ方向への10年に及ぶ大旅行の始まりであった。

一行は同年3月ストックホルムを出発し、陸路ロシアを經由して、翌年3月ペルシャの帝都イスファハンに到着した(途中バクーの燃える油田を探検)。そこに一年半滞在し任務は完了したが、ケンペルは、使節団とスウェーデンに帰る道を選ばず、東方探検のためオランダの東インド会社に医師として入社する道を選んだ。1685年12月新しい任地、ホルムズ湾岸の都市バンドル・アッパーズに行き(旅の途中遺蹟ペルセポリスを探検)、二年半滞在した後、インドに向かった。インドでは南部沿岸のツチコリン、コーチン、セイロンに滞在したが、勤務のためインダス河上流の探検もできぬままインドに幻滅し、方向を転じて1689年10月バタヴィアに来ることになった。バタヴィアは、オランダ東インド会社の本部のあるところであり、多くのヨーロッパ人がヨーロッパ風の生活を営む町だったそうである。ここで彼は何人かの友人を得たが、なかんづく総督カンブホイス(Johannes Camphuis, 1634-95)の知遇を得、その勧めで日本行きを決心したのであった。

ちなみに、カンブホイスは、以前三度にわたって日本勤務をしたことのある大の日本臍員・日本通であり、日本について詳しい記録を残していたそうである。後年ドゥーフが、ケンペルの『日本誌』はカンブホイスからの盗作であると言っているが(『鎖国の思想』55-6頁、『ケンペルと徳川綱吉』90頁以下参照)、たしかに、『江戸参府旅行日記』を読んでも、道中見聞した文物について単なる通行人には調べられるはずがないと思われるほど詳しい説明がつけられている。しかし、小堀氏もベイリー氏も、ケンペルはカンブホイスから資料を譲り受けただけでも、『日本誌』はケンペル独自のものだとしている。たしかにケンペルは、F. Caronの『日本大王国誌』(1652)やA. Montanus『東インド会社使節日本皇帝訪旅記』などの先行文献や、それに加えて膨大な蘭館日誌やカンブホイスの資料を読んで、日本について予備的な知識を得ていたが、しかしなにより、自ら日本の文献を(蘭訳で)読み、日本人から直接聞き、そして直接見(そのとき素早く測量とスケッチをした)、先行のものを訂正しつつ独自の記録をつくり上げていった、と言うのである。

1690年5月バタヴィアを出発したケンペルは、途中一ヵ月シャムに立ち寄った後、1690年9月23日出島に到着した。これ以後彼は約二年半、二度の江戸参府のほか、カントに引用されていたように、囚人のごとく出島に幽閉され、監視される生活を送ったのである。しかし、そのまま手を拱いているケンペルではなかった。彼は数学や天文学の教授や医療活動を通じて上役人や通詞の信頼を得、本来禁制であるにもかかわらず、彼らから日本についていろいろなことを聞き出すことに成功した。とりわけ、助手として与えられた通詞志望の若者からは、オランダ語を教える代わりに、日本語を学び、そのみか「大日本王代記」や「嶋原記」などをオランダ語に翻訳してもらうなど、日本について多くのことを学んだ(その若者の名は記されていないが、ベイリー氏は後の通詞今村英生だろうと推測している)。1691年2月13日から5月7日にかけての第一回江戸参府と1692年3月2日から5月21日にかけての第二回の江戸参府とは、檻の外に出る唯一の機会であり、また、それまで書物や伝聞で得た知識を実見によって確かめ修正するチャンスであったろう。とりわけ、江戸城での綱吉との接見は彼を興奮させたものらし

く、将軍やその臣下や大奥の女性の前で商館員がヨーロッパ風の挨拶やダンスをして見せる様子や、ケンペルが恋歌を唄って見せる様子（図版1）を詳しく記述している。

ケンペルは1692年10月31日日本を離れてヨーロッパに戻った。レイデン大学で学位を得たのち、故郷レムゴー近郊のリーメに居を構えた。そこで静かに執筆活動を打ち込むつもりのところ、4年後リッペ伯フリードリッヒ・アドルフの侍医となってからは、十分な時間が確保できないことを嘆く毎日だったようである。それに加えて33歳も若い妻との結婚（1700年）は彼の晩年を不幸なものにした。そして1716年11月2日生涯を終えた。

ところで、ケンペルがその東方旅行の記録を書物として生前出版できたのは、ペルシャについての旅行記を中心とする。

『廻国奇観』（*Amoenitatum exoticarum politico-physico-medicae, quibus, continentur variae relationes, observationes et descriptiones rerum Persicarum et ulterioris Asiae, multa attentione, in pergrinationibus per universum Orientem, collectae, ab auctore Engelberto Kaempfero,*

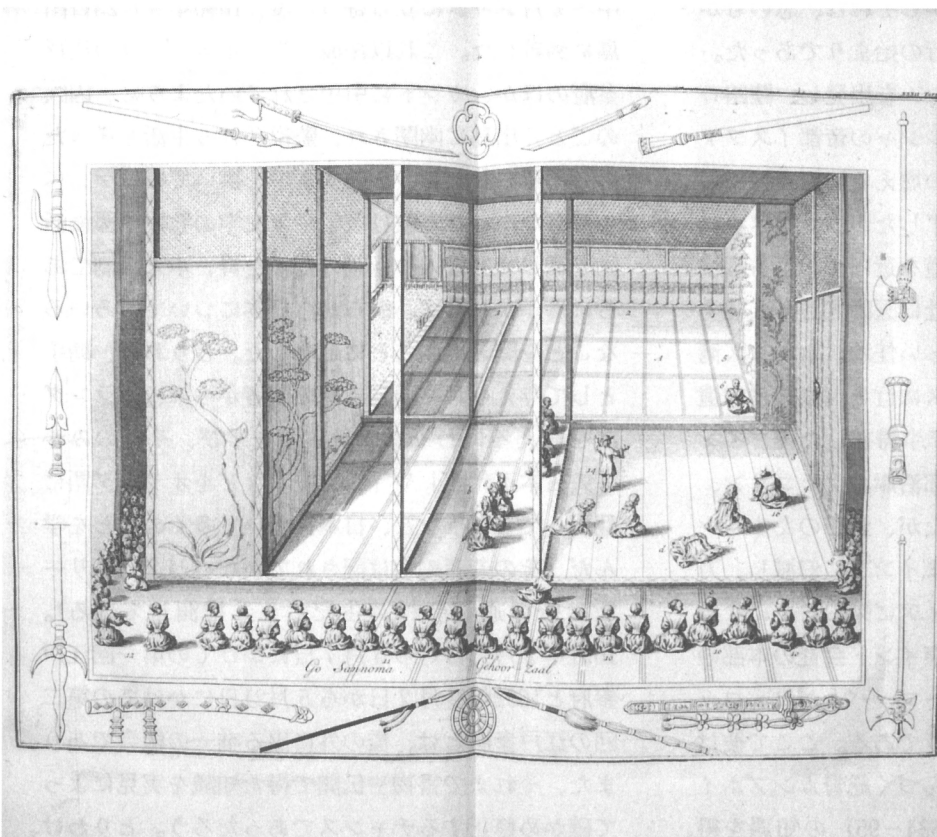
Fasciculi V, Lemgovae, 1712）のみであった。彼はそこで以下三巻の書物

1. *Japoniam nostri temporis*（当代の日本について）
2. *Herbarii Trans-Gangetici Specimen*（ガンジス河以遠植物界標本図鑑）
3. *Hodoeporicum tripartitum*（三部より成る世界旅行記）

の出版を予告していたが（『鎖国の思想』43頁）、当時の出版の難しさも手伝って、準備をすすめていた日本についての本の出版すら果たさぬまま世を去ったのである。

ケンペルの三人の子は夭折していたので、甥で医師のヨーハン・ヘルマン・ケルペルが相続人になった。ヨーハンは1725年伯父の残した手稿、スケッチ、植物標本、絵図、書籍などを英国の収集家スローン卿（Hans Sloane）に売却した。スローン卿はそのうち現在の『日本誌』に相当する部分の英訳の出版を思い立ち、スイス人医師ショイヒツェル（Johann Gaspar Scheuchzer）に資料整理・校訂と翻訳を依頼し、1727年刊行されたのが、

『日本誌』（*The History of Japan, / Giving / An Account of the ancient and present State and / Government of that EMPIRE ; / OF / Its Temples, Palaces, Castles, and other Buildings ; / OF Its Metals, Minerals, Trees, Plants, Animals, Birds and Fishes ; / OF The Chronology and Succession of the EMPERORS, / Ecclesiastical and Secular ; / OF The Original Descent, Religions, Customs, and Manufactures of the / Natives, and of their Trade and Commerce with the Dutch /*



（図版1）将軍拝謁の図

and Chinese./Together with a Description of the Kingdom of Siam./Written in High-Dutch by ENGERBERTUS KAEMPFER, M.D./Physician to the Dutch Embassy to the Emperor's Court; and translated from his/Original Manuscript, never before printed, by/J.G.SCHEUCHZER, F.R.S.and a Member of the/College of Physicians, London./With the Life of the Author, and an Introduction./ILLUSTRATED with many COPPER PLATES. /LONDON:/Printed for the TRANSLATER, MDCCXXVII)

である(その一冊が天理大学に所属されている)。そして1729年にはこの英訳本から重訳されたフランス語版とオランダ語版が出版され、1733年にはオランダ語の改訳本が出た。ケンペルの国語たるドイツ語では1749年、フランス語版からの重々訳(しかも抄訳)がJ.B. du Halde 編 *Ausfürliche Beschreibung des Chinesischen Reiches und der großen Tartarey*. 4 Bde., Rostock, 1749. の付録として載せられたにすぎなかった。

ところが1773年ケンペルの最後の相続人の姪が死去した際、『日本誌』に相当する二種類の手稿が発見された。それらの手稿は、その出版を計画したレムゴーの書店マイヤーによって娘婿で歴史・地理・経済学者ドーム(Christian Wilhelm Dohm)のもとに送られた。ドームは、筆跡鑑定からそれらがケンペル自筆の原稿(スローンに渡ったものより古い原稿)と甥の手になる(スローンにわたった手稿の)浄書原稿であることを突き止め、更に書店の注文でバロック調の古風な文体の原文を現代的文体に変更し(ベイリー氏は、現在残っている大英博物館所蔵のケンペルの草稿と対照してみると、ドーム版もジョイヒツェル版も、文体変更だけでなく、過度の日本賛美を緩和するなどの内容変更も含んでいると指摘している)、かくて1777年と1779年にドイツ語版上下巻が出版された。これが、たいていの日本語の翻訳『日本誌』の元になっている「ドーム本」*Geschichte und Beschreibung von Japan. Aus den Originalhandschriften des Verfassers, herausgegeben von Christian Wilhelm Dohm*. 2 Bde. Lemgo, Verlag der Meyerschen Buchhandlung.

1777-1779.

である。年代からみてカントはこのドーム版を見ることができた。ていねいな照合はできていないので、おおよそのことしか言えないが、日本の鎖国に関する知識や天皇(「精神的君主」と将軍(「世俗的君主」)の区別(『自然地理学』上掲書370頁)など、カントが日本についてケンペルから学び知ったものは多いと思われる。

さて、わが神原文庫の『日本誌』(De Beschryving Van Japan)は、1733年のオランダ語改訳本である。その題扉は写真(口絵右)を載せているのでここで重複することは避けたい。その扉の記載は、オランダ語を知らぬ身ながら辞書を片手に調べてみたところでは、主タイトルが、英訳本の“The History of Japan”(日本史)から“De Beschryving van Japan”(日本誌)に変わり(ドーム版のように“Geschichte und Beschreibung von Japan”とするのがいちばん内容に合っているように思う)、下五行に新たに、ハンス・スローン卿の監督下刊行され、英語からオランダ語に翻訳されたということと刊行者の名前・所在地が記されているのを除けば、英語版の題扉のほぼ逐語訳になっているようである。

オランダ語版は書誌的価値はジョイヒツェル版やドーム版より劣るかもしてない。しかし、「鎖国」という語を初めて日本語に導入したと言われる志築忠雄の「鎖国論」(享和元(1801)年)はオランダ語版の『日本誌』の抄訳だったのである。江戸後期鎖国について論じる者は必ずその「鎖国論」を読んでいたようであるから、してみると、その大本の典拠はケンペルのこの『日本誌』だと言ってもよいであろう。もちろん、それを蘭語で読む者もいたにちがいない。神原先生がこの本を入手された経緯は分からないが、彼らが読んだ『日本誌』のひとつである可能性は十分である。それなら、「ハルマ」と同様、この本にロマンを見いだすこともできようというものである。

